

Toho

東邦キャンパス

Campus



vol.141
2025年(令和7年)1月発行

発行 学校法人 東邦学園 〒465-8515名古屋市長東区平和が丘三丁目11番地 TEL 052 (782) 1241 FAX 052 (781) 0931
HP [東邦学園](#) [愛知東邦大学](#) [東邦高等学校](#)

特集1 戦後80年で「平和の屏風」制作中

特集2 短大開学60年と『東邦学誌』



「平和の屏風」 戦後80年で美術科生徒たちが制作中。「慰霊の日」式典で展示されました。(12月10日)



名東区50周年で東邦学園がオリジナルファンファーレを寄贈
ファンファーレはTOHO MARCHING BANDも参加した記念のユース
音楽祭で初演奏されました。(12月14日)

目次

年頭所感



昭和100年・ 戦後80年に 考えたいこと

学園理事長
榎 直樹

新年の初め、皆さんは今年をどんな年だと捉えますか。恐らく「歴史の回顧」

に光が当てられると思います。「昭和」で数えていくと、今年が100年目になるからです。

天皇制と一体の元号で時代を括ることに疑問はあるでしょう。が、36年前に平成へ改元となるまでの昭和の62年間余(1926年12月25日～1989年1月7日)は、稀に見る激動の時代でした。100年目を機に、昭和を改めて検証する必要があると感じます。

大陸侵攻・大戦・原爆投下・敗戦・復興・高度成長(象徴が新幹線開業、東京五輪初開催、大阪万博)・公害を体験しました。国の針路は、欧米の帝国主義を追いかけて列強と軍事的に肩を並べるのが大日本帝国の目標であり、80年前敗戦・占領下に置かれると、アメリカが草案を作った新憲法のもと「民主・平和国家」に一変し、物質的豊かさをひたすら求めて世界第二位の経済規模へと国の姿が百八十度転換した時代でした。

昭和を生徒・学生、若いご両親や教職員から見ると「レトロな雰囲気」「猛烈に働くオッサンの時代」などと映るでしょう。私を含む戦後間もない頃に生まれた70代の実感は、同世代の人口が今の3～4倍、競争環境の中で鍛えられ、最後は世界一の大金持ちだと数年間信じた(バブル景気)、そんな時代でした。

考えて頂きたいのは、昭和の良さを認めつつも、悪しき発想や古い制度から訣別していないことです。悪弊は、昭和が終わっても理不尽な事件を招いています。

10年前、東大を卒業し国内最大手の広告会社に勤めた女性を、過労から入社9か月で飛び降り自殺に追い込んだのは、猛烈社員時代の儲け至上主義であり、「馬車馬のように働かせるオッサン時代」の体質の犠牲者でした。13年前、大阪市立高校のバスケットボール部主将が自ら命を絶ったのも、怒号と体罰で選手を鍛えればチームは強くなるという、教員の驕った姿勢が追い詰めた死でした。過労死や体罰は今も絶えません。

私が小学生の頃、運動場に整列すると男子が前、女子がその次。学級名簿も男が先、女がその後という順序でした。選択的夫婦別姓制度も与党が導入を拒み続けています。そうしたニッポンに対し、男女間の格差を政治・経済・教育・健康の部門で数値化して国際比較した「ジェンダー格差指数」は、昨年146か国中118位にとどまっています。「男優位」の遺物が依然続いています。

昭和時代の学校は、生産性向上を最優先する工業生産的な発想に染まって、児童・生徒を一つだけの正解により多く、より早く辿り着けさせるかを競わせていたと思います。今の学習は探究的で深い学びを、協働的に進めるスタイルに変わりつつある半面、学力というモノサシで序列をつける指導は、なお主流を占めています。

昭和時代最大の傷跡は戦争の惨禍です。地域紛争が、「第3次世界大戦」へ広がることも危惧される今、より深く後代に引き継がれるべき歴史を、本年が「戦後80年」であることもかみしめ、一層ていねいに学ぶ1年にしましょう。



AICHI-TOHO NEXT CHALLENGE 2030

愛知東邦大学長
鶴飼 裕之

皆さま、お健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中に皆さまから賜りました愛知東邦大学の教育研究活動へのご理解、ご支援に対して厚くお礼申し上げます。

げます。本年も、本学がめざす目標に向かって一步一步確実に前進してまいります。

さて、東邦学園の前身である東邦商業学校が開校して102年目にあたる本年、愛知東邦大学は、大学創設25周年を迎えます。100年前、新たな電気というエネルギー源の誕生と大量生産の時代を迎えた産業社会の大変革期の中で、学園創設者である財界人下出民義先生は、「現代社会の求むる着実なる実業青年を養成し以て社会的報恩の一端に資する希望の下に創立」という強い意思をもって人材育成事業に臨まれました。そして、創設から100年後の現在、グローバル化、デジタル化、ソーシャル化の急速な進展によって、再び

社会は大きく変わる時代の転換点にあります。愛知東邦大学は、学園創立の精神を受け継ぐという確固たる矜持をもって、大学改革構想“AICHI-TOHO NEXT CHALLENGE 2030”の下で「ひとり一人の個性を磨き、地域・世界へと繋がる共感力を育む人材育成の拠点形成」をめざしています。

本年4月より、経営学部は、新たに「ビジネス学科」「コミュニケーション・デザイン学科」を開設します。現代社会の様々な問題に対して課題を発見し、解決する方法をマーケティングの実例や実践から学ぶ経営学を基盤として、二つの学科に進んでより専門性を高めていきます。ビジネス学科では、地域社会や企業と連携し実践的に学ぶプロジェクト型授業を実施し、ビジネス構想、地域活性化、グローバルビジネス、観光などにおける課題を如何にビジネスで解決するのかを学んでいきます。コミュニケーション・デザイン学科は、他大学に先駆けて新設した、多様な社会において効果的な情報発信と人々のつながりを創出するスキルを養う学科です。ブランディング、マーケティング、広報宣伝といった分野において、消費者行動を理解し、その行動変化を促すコミュニケーション力を身につけま

す。そのために、実際にグラフィックデザインや映像制作、イベント演出を行うライブ型授業を実施し、制作したモノの効果検証や、自らの考えを伝えるためのプレゼンテーション能力も身につけます。卒業後は、広告、広報、デザイン、イベント企画など、多岐にわたる職種での活躍が期待されます。

一方、人間健康学部では、データサイエンスを基盤技術として、スポーツ科学、心理学、健康情報に関わる専門分野を選択的に学ぶコースを2026年度に開設する準備をしています。コンセプトは“Science and Information for Human Wellness”です。また、教育学部では、教員養成コースにおいて、小学校教員一種免許に加え、中学校教員(保健・体育)一種免許も取得できるようになりました。体験型学習、サービスラーニングなどを取り入れ、現場での対応力や子ども一人ひとりに寄り添う力、そして豊かな表現力をもった“先生”を育成します。

愛知東邦大学は、不断の改革を進めることで次の25年をめざして進化してまいります。今後とも引き続き、皆さまのご理解、ご支援をお願い申し上げます。



希望に満ちた スタートに

東邦高等学校校長
藤本 紀子

皆さまあけましておめでとうございます。

旧年中は東邦高等学校の教育活動にひとかたならぬご声援・ご支援をいただき誠に有難うございました。

2025年を迎えるにあたり、4月にスタートいたします「世界探究科」を皆様にご紹介したいと思います。

東邦高校では、2020年度、地球規模の課題に取り組む志とスキルを持った生徒の育成を目指す「国際探究コース」をスタートし、語学教育の充実のみならず、1、2年次は探究活動・研究活動、3年次には卒業研究・卒業論文に重点的に取り組んでまいりました。3年間の本コースの取り組みと生徒の成長は、大学の先生方からも大いに評価されているところです。

まだまだ先、と思っていたSDGsのゴール2030年にあと5年。しかしSDSN(持続可能なソリューション・ネットワーク)の「持続可能な開発報告書2024」は、

世界的な進捗はゴールの「16%である」、「残りの84%は限定的な進捗か、あるいは後退している。進捗は依然遅すぎ、国によってばらつきがある。」と現状に警鐘を鳴らしています。SDGsに示された17のゴールは、持続可能な世界・持続可能な開発のためのいわば恒久的なゴールであり、今こそこれらの課題を乗り越えるために、より高い志とより深い専門性で挑戦を続ける人が求められています。

2025年度4月スタート「世界探究学科」は、人と人・国と国の架け橋になれる人、異なる文化や価値観との出会いから新たな価値を創造できる人を育てる、という「国際探究コース」の精神そのままに、専門学科としてより深い専門性を身につけるための環境を整えた学科です。この学科の存在は、これからの東邦高校の教育活動全般に、広がり多様性を与えてくれるだろうと私は期待しております。

「教えるとは共に希望を語ること」フランスの詩人ルイ・アラゴンの詩の一節です。VUCAと言われる先行き不透明な現代、世界も日本も、そして教育界も、急速で大きな変化の波に揺さぶられています。

困難があっても、生徒の皆さんと「共に希望を語る」存在でありたい。本年も教職員一同頑張ってまいります。

本年も何とぞよろしく願いいたします。

特集 1

戦後80年で制作進む「平和の屏風」 私たちが描く「過去・現在・未来」

美術科生徒有志26人の挑戦



夏から秋、冬へと続いた制作作業

戦後80年と「なごや平和の日」のスタートを記念した美術科生徒有志による「平和の屏風」の制作が大詰めを迎えています。2月完成をめざす屏風は12月10日に営まれた学園「慰霊の日」献花式会場で初めて公開されました。

屏風のテーマは「平和を切に希求し、その築き手である私たちが描く『過去・現在・未来』」。美術科では有志生徒24人(後に2人が加わり26人)が制作活動に手を挙げ、2024年6月12日のキックオフミーティングで活動が始まりました。テーマを具体化するため対話を重ね、アイデアを出し合いました。生徒たちの平和に対する言葉を抜粋します。

- ▽個人の自由が尊重され、過ごしやすい環境があること。
- ▽生まれ、死ぬまでの間に、理不尽に命を奪われることがあってはならない。
- ▽心からの笑顔と周りの笑顔。何気ない日常。素直に平和を願うことができるのが私の求める平和。
- ▽誰もが一度でも幸せを感じることができ、安心して生活できる空間が一つでもあること。
- ▽戦争、犯罪、差別がない。環境問題がない。平等。いじめがない。
- ▽人類の中から争いや戦争が消えることはないと思うけれど、それでも投げ出さずに希望を持って平和を達成するために邁進すること。

オリーブで描く「過去・現在・未来」

屏風制作の方向性を決める中で「過去・現在・未来」の、いずれにもオリーブを描く案が採用されました。



推定樹齢1000年といわれる「千年オリーブ」の取材(東山動植物園で)



作品のイメージや方向性などを練るために作成された小下図

ちょうど実をつける時期であった東山動植物園の推定樹齢1000年と言われる「千年オリーブ」を取材しました。初夏とは思えない真夏日となったため、体調に留意しながら数分ずつ交代でスケッチを重ねました。その後、30枚以上の小下図を作成して、作品の全貌を具体化し、本画制作に移行しました。

授業、考査、行事の合間を縫って



授業や行事の合間も使い制作に励む生徒達

木材で屏風を組み立て、正麩糊しょうふのりと呼ばれる日本画制作でパネルの水張りや裏打ち作業に適したでんぷん糊を大鍋で煮ては濾して、ていねいに溶かします。これを、糊刷毛のりぼけと撫刷毛なでぼけで下貼り、裏打ちし本紙を貼りこみ、胡粉こふんという白色顔料で地塗りします。

下図を基に墨で骨描きを施しいよいよ彩色です。使用するのは岩絵具いわえのぐ、水干絵具すいひえのぐ、土絵具、雲母などです。自然由来の天然絵具は日本を含め多様な国から取り寄せられており、採掘時期や場所で色は変化し、採掘次

第で失われる色もあります。大作に合わせて、多量の絵の具を溶くだけで体力も時間も要します。絵の具を溶く皿は洗面器を使い、大きな刷毛で一気に色を置く様は壮観です。

生徒達は授業の学習・課題制作はじめ、考査の準備や文化祭等行事の合間を縫い、限られた時間の中で高さ1800mm、総幅5400mmの大作の制作を進めています。有志生徒の自由意志を尊重するため、毎回全員がそろろうことはなく、時には数名で制作に向かうこともあります。

12月10日の「慰霊の日」では完成まで至らなかったものの制作報告を兼ねて展示しました。ここまで制作を進めることができたのは有志生徒たちの強い使命感と行動があつてのものです。平和を維持するには、各自の思いだけでなく使命感と行動によって実現でき、他者との対話を重ね、希求し続けることが大切でしょう。思いや願いを形にすることは容易ではありませんが、今後も制作を継続し屏風の完成を目指します。

(美術科・加藤 広士)

オリーブに託された平和へのメッセージ

12月10日に初めて公開された制作中の屏風について



「慰霊の日」式典会場で初めて公開された6枚折屏風

て、榎直樹理事長は「慰霊の日」の式典あいさつの中で生徒たちの労をたたえ平和への決意を述べました。(抜粋)

「屏風のメッセージは極めて明確です。名古屋の戦時中のグレーの家屋が、現在の姿に復興・発展し、未来都市へと変貌する過程を貫くものとして、オリーブの木と実の成長を描いていることです。オリーブは『平和』や『安らぎ』の象徴とされ、国連の旗にも使われています。誰かがオリーブの木・平和の花を運んでくることを待ってはいけません。本校生徒たちが(「なごや平和の日」実現へ)バトンを受け継いできたように、私たち自身が平和の木を植え、未来へ向けて大きな実を育てることです」

美術科2年生46人がピースあいちで企画展 語り部の記憶を作品に

美術科 小塚 康成

「なごや平和の日」が制定された2024年には美術科生徒たちの作品が中心となった企画展「名古屋空襲を知る」が名東区よもぎ台の「戦争と平和の資料館ピースあいち」で開催されました。美術科の生徒が戦争に関わる作品制作を行うのは2018年に続き2回目です。

企画展は3月12日から5月18日まで開かれ、制作には美術科2年生46人が参加しました。2023年6月の総合学習の時間に、ピースあいちの語り部である寛久江さんをお招きし、空襲の体験を聞く機会が設けられました。そこから約半年かけて、それぞれの受け止めを美術作品に表しました。日頃の授業では、日本画や油絵、彫刻やデザインを学ぶ生徒たちですが、今回は表現方法を自由とし、作品の大きさや素材、見せ方も個々で決めることにしました。その結果、水彩や油絵、CGやイラスト風なものから、立体作品まで実に様々な作品が並びました。表現された内容は実際に寛さん自身が目にした光景を再現した作品も多かったですが、その一方で戦禍の比喩的な表現も目立ち、素朴な服を着てワンピースに憧れる女の子や、防空壕の中で亡くなった人たちの命など扱う作品もありました。

他には、ウクライナやガザなど、現在も世界では戦争が続いていることに照らし合わせ、空襲の体験講話に限らず、戦争



そのものに対する警鐘を表現した作品も並びました。さらに興味を持った生徒の中には、夏休みをかけて広島原爆資料館取材した生徒や、表現を考える中でピカソのゲルニカをはじめ、多くの戦争絵画を調査する生徒もいました。いずれにしても今回の制作を通して、美術を学ぶ生徒たちが、自分たちにとって何が伝えられるかを考える貴重な機会になったと感じています。

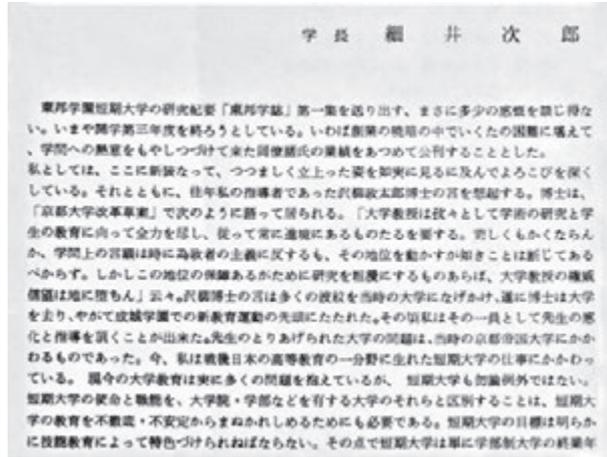
展示期間中は新聞社やNHKはじめ、多くのメディアに取り上げられることになりました。ピースあいちでの公開後は創作棟のギャラリーで展示を行い、他校のフェスティバルなどでも展示を行いました。今回の作品が、多くの方々に関心を持って見ていただけたことに感謝します。

特集
2

短大開学60年と『東邦学誌』 教員の研究論文を紹介し続け57年目



『東邦学誌』の歩みを振り返った中山教授



創刊号に寄せた細井学長の巻頭言

2025年は愛知東邦大学が開学25周年、前身である東邦学園短期大学開学から60周年となります。短大開学3年目から現在まで発刊され続けている教員執筆の研究紀要『東邦学誌』の歩みについて、短大時代から教員を務める経営学部の中山孝男教授(理事)にまとめていただきました。

『東邦学誌』は、言うまでもなく愛知東邦大学の前身である東邦学園短期大学の時代以来、東邦学園大学の時代を経て発行され続けている紀要です。私は、1988(昭和63)年4月に東邦学園短期大学商経科に職を得て、早速その年度(ご存じのとおり、翌1989(昭和64)年は年明け1週間で平成になったので、)平成元年3月に発行された紀要に論文を掲載させていただきました。それ以来、最近まで何本かの論文などを投稿し、掲載してもらった関係から、小論では、『東邦学誌』にまつわるエピソードや思い出すことを交えながら、この機会に調べたことも含めて、その歴史などを辿っていききたいと思います。

はじめに指摘しておきたいことの一つに、『東邦学誌』が、発刊以来いわゆるレフェリー(査読)制をとらずに論文等を掲載していることがあります。専門分野によっては、査読なしでの掲載論文は業績カウント＝ゼロとみなされていることがあるようで、本学の教員の中にも全く本誌を無視されている方もおられますが、査読なしの雑誌論文にもそれなりの利点・存在意義があることはあると思っていますので、私は『東邦

学誌』のような紀要の存在を全否定する考えには与(くみ)しません。(このことは、私が、所属しているある学会誌に関して、査読の実態の一端を知っていることから言えることでもあります。)

創刊時は「人文科学」「自然科学」「社会科学」で区分

さて、『東邦学誌』は、東邦学園短期大学時代の1968年3月31日に第1巻が発行されています。創刊号の掲載論文数はすべて単著で9本でした。今回、このような企画をいただいたので初めて創刊号を見たところ、目次が「人文科学」「自然科学」「社会科学」の順に区分されているのを知りました。この区分は第4巻までなされていて、第5巻からは現在のように区分なしになっています。その後、毎年度1冊ずつ刊行されています。1994年度に年2冊発行となるまでの掲載論文数を見てみると、短大創立10周年記念号と、同25周年記念号の2巻を除き、すべて10本未満でした。少ないときには1年間の掲載論文数が3本とか、4本のような年度が何度かありました。そのように掲載希望が少ない時期だったと記憶していますが、紀要編集長を兼ねる当時の図書館長の先生から、「中山先生には今、書きかけの論文などありませんか？」などと尋ねられ、「実はありますが」と答えたところ、即、掲載が決定したということもありました。

こうした事情から、何とか掲載論文数を増やそうと

いう目的からでしょうか、90年代のある時期には、『東邦学誌』に論文を掲載すると執筆料という手当が支払われていたのを覚えています。(確か、論文1本あたり3万円だったと記憶しています。)今どきの学術専門雑誌の中には、掲載料として決して少なくない金額を支払わせる(そして、それをビジネスとしている)ものもあるようですが、本学の30年ほど前の実情とはまさに隔世の感があります。もちろん論文掲載料の支払いは、短期間のみで廃止されました。

巻末に「教員研究活動業績一覧」が登場

さて、1994年度から、年2冊発行になりましたが、それでも年間の総掲載数が急増したということはなく、年間の論文掲載数はだいたい10本前後で推移していました。また、あまり気付かないことですが、1995年6月発行の号から毎年度、巻末に各専任教員の年間業績一覧が掲載されるようになりました。正式な名称は、「教員研究活動業績一覧」で、前年度4月から3月までのさまざまな業績(論文名・掲載誌名、学会発表、その他)が掲載されるようになりました。これは、他の大学の紀要でもよく見られるもので、それまでの『東邦学誌』にはなかった一覧でしたので、紀要らしい紀要になったなと思ったのを覚えています。その一覧には学術論文などのほかに、当時はまだ短大時代でしたから、デザインの先生もおられた関係で、「ポスター」などの業績も掲載されていました。この「教員研究活動業績一覧」は、2009年6月発行の第38巻第1号における掲載が最後になりました。廃止になった理由として考えられるのは、こうした研究業績の報告を、現在まで続けている各専任教員の「自己点検評価報告」の中で行うようになったからだろうと思います。



短大・大学合同号となった第30巻第1号(2001年6月)

そして、2001年4月に東邦学園大学(経営学部地域ビジネス学科のみの単科)が開学し、『東邦学誌』もいわゆる4大(4年制大学)の紀要となりました(なお、短大は2007年度まで存続しています)。この年から冊子の表紙がコーティング紙になり、見た目が変わりました。また、それまでは表紙は原則白色(例外的に緑色や、薄い青色もありました)でしたが、これ以降、クリーム色になりました。ちなみに、『東邦学誌』は、発刊以来、紙型はB5版のままで変わっていません。ただ、原則横書きですが、時期によって2段組の号もあれば1段組

の号もあり、統一されていませんでした。

大学時代になりまして、論文等掲載数も、以前よりは若干多くなってきました。2000年代の論文等掲載数は、年間15本程度と徐々に増えてきて、2010年代になると、さらに増えて、年間20本を超える論文等を掲載するようになり、2017年度には29本の論文等が掲載されました。この数が現在までのところ、年間の最大掲載本数となっています。そして、実はその後は徐々に掲載数が減少傾向にあります。

2020年度からは電子版のみの発行に



愛知東邦大学教員のための執筆となった第37巻第1号(2008年6月)

その後の大きな変更点とえば、2020年度から『東邦学誌』は、電子版のみの発行となり、紙での印刷はなくなりました。ということで、冊子の形で残っているのは、2019年12月発行のものが最後です。そして、2020年6月発行の第49巻第1号からは、電子版のみの発行となり現在に至っています。

また、『東邦学誌』の第32巻第1号(2003年3月発行)以降に掲載された論文等は、本学の機関リポジトリにすべて登録され、本学のホームページから検索・ダウンロードできるようになっています。

ここまで、1968年に創刊され50年以上の歴史がある『東邦学誌』について、いろいろと書いてきましたが、この小論では各巻各号のそれぞれの論文および執筆者については言及しませんでした。ただ実際に最初の頃の『東邦学誌』を手にとってみると、その表紙には私にとっても懐かしい先生方の名前が載っていますし、当然ながら時代が異なれば扱われているテーマもやはりその時代を反映して異なっています。大きく分ければ短大時代と大学開設後で、大学時代でも20年前と現在(電子版のみになっています)とではやはり異なっています。本学紀要『東邦学誌』は、2019年度版までのバックナンバーが、学術情報センター(本学L棟3B階の開架書庫)に一部を除き並んでいますので、本学に来訪し実際に手に取って読まれ、皆さんそれぞれの学生時代に思いを馳せるのもよろしいのではないのでしょうか。

中山 孝男

中山先生は2025年3月を持ちまして愛知東邦大学教員を退職されます。東邦学園短大時代も含め37年間に及ぶ教員生活、お疲れさまでした。

名東区 50周年

東邦学園が記念オリジナル ファンファーレ贈る

名東区が1975年2月に千種区から分離して50周年を迎えたのを記念して東邦学園から名東区にお祝いのオリジナルファンファーレが贈られました。「輝く未来へのファンファーレ」と命名され、12月14日に猪高中学校で開催された「めい冬(とう)フェスティバル『ユース音楽祭』」のオープニングセレモニーで高らかに奏でられました。

ファンファーレは、全国の吹奏楽団を長く指導し、数々の作曲も手がけてきた札幌大谷大学芸術学部音楽学科客員教授の内藤淳一氏が、東邦学園からの依頼を受けて作曲。吹奏楽の様々な楽器を用いたフル編成で演奏できるもので、華やかな響きで始まり、誇らしく気品高いメロディーが続きます。

11月11日には名東区長室で目録贈呈式が行われ、名東区側から杉浦橘区長、新美君栄区政部長、区制50周年記念事業実行委員会の林年夫会長、東邦学園から榊直樹理事長らが出席しました。録音で披露されたファンファーレに杉浦区長は「50周年事業の中で新しいレガシーを築くもの。幅広い年代層の方にも愛していただけよう育ててまいります」とあいさつ。榊理事長は「東邦学園がこの地に来て60数年、当時は千種区の一部で、見渡す限り畑や原野だったそうです。以来、学園の歴史の半分を名東区でお世話になってきました。この地を育ててこられた皆様に、ファンファーレを受け取っていただいて、これからの50年、100年に、

多くの場所で演奏していただければ嬉しいこと」とあいさつしました。

猪高中学校で開催された「ユース音楽祭」では、東邦学園公式バンド「TOHO MARCHING BAND」(TMB)が正午からお出迎えパレード。0時半からのオープニングセレモニーで、特別編成ファンファーレ隊(神丘中学校吹奏楽部、名東高校吹奏楽部、千種高校吹奏楽部、東邦高校マーチングバンド部、愛知東邦大学吹奏楽団合同チーム)により、「輝く未来へのファンファーレ」の初演奏が高らかに響きわたりました。

吹奏楽の活動が盛んな名東区の特性を生かそうと企画されたユース音楽祭では、ファンファーレ演奏に加わった合同チーム各校吹奏楽部らが、10年前、20年前、30年前、40年前、50年前のポップスにのせて名東区の50周年を祝いました。



目録を贈る榊理事長と杉浦区長

50周年ロゴマークは美術科生徒が制作

名東区制50周年では、美術科の生徒がロゴマークを制作しました。名東区からの制作依頼を受けて取り組んだもので、過去に名東区のマスコットキャラクターである「名東勝家くん」を美術科の生徒がデザインし、大変好評であったということも、依頼のきっかけとなったようです。

ロゴマーク制作においては美術科1、2年生の生徒が中心に取り組みました。実際にデザインしたものが、多くの人の目に触れ、喜んでもらえるという貴重な機会であるため、朝デッサンの時間や授業の一部を変更し、約1か月かけて制作を行いました。

全体で70近いデザイン案が集まり、その中から青木健人さんと岩塚奏さんの2人の作品が採用となりました。青木さんは、名東区の基本理念である「つながり

とひろがり」に着目し、直線と曲線の要素のみを使ったシンプルでモダンなロゴマークを制作。岩塚さんは、植物の持つ柔らかく温かみのあるデザインを提案し、名東区の今までの歴史を創られた方々への深い敬意の念も表現しました。2人は、「名東の日」の5月10日、牧野ヶ池緑地公園での式典で感謝状を授与されました。



硬式野球部

秋季リーグ 24本塁打の量産記録



上左から時計回りに清水、柳瀬、毛利、寺田選手

硬式野球部は2024年秋季2部リーグ戦を7勝3敗(Bグループ2位)で終わりました。1部だった春季に続き、投手力の安定が課題として残りましたが、攻撃面では10試合中5試合がコールド勝ち、本塁打24本という2部リーグ史の伝説として残りそうな量産記録を残しました。

試合は大半が愛知東邦大学日進グラウンド(両翼94m、中堅115m)で行われました。1部リーグメイン会場はパロマ瑞穂球場(両翼99.1m、中堅122m)ですが、2部リーグの試合会場は、本塁打が出やすいと言われる大学グラウンド球場を中心に行われることもあり、本塁打記録などは、愛知大学野球連盟の公式記録として残っていません。1部リーグでのシーズン最多本塁打記録も残っていませんが、神宮球場(両翼97.5m、中堅120m)で行われる東京6大学野球リーグでは2004年秋季リーグで法政大学が20本の最多本塁打記録を残しています。

24本の本塁打を打った選手は10人。5本が清水雄也(4年)と柳瀬太陽(3年)、3本が小川泰空(2年)と市岡大知(4年)、2本が河合峻佑(3年)、毛利水樹(4年)。1本が尾間響(2年)、竹内駿介(1年)、福森夕騎(3年)、寺田将馬(4年)の4人でした。

9月21日に熱田愛知時計120スタジアム(両翼91.44m、中堅115.82m)で行われた名古屋大戦では、5回、DH清水がライト越えて堀川に飛び込む3号2ランアーチを放ちました。9月29日の愛知産業大戦では初回から打線が爆発。2回に河合の満塁2号、5回に柳瀬の5号、7回に清水も3ラン4号アーチが飛び出し14-3での7回コールドで試合を決めました。

4年生として最後のシーズンを終え、2本塁打を打った毛利水樹主将は「入替戦出場は逃しましたが、みんなと一緒に最後までやり切ったという思いです。後輩たちにはレベルの高い1部リーグの舞台で、高みを目指してほしい」と話しています。

男子サッカー部

初の1部リーグ 残留にあと1勝届かず

東海学生サッカーリーグで男子サッカー部は2024年度、初の1部リーグを戦い抜きました。2002年の創部

以来22年目にしてつかんだ晴れの舞台でした。しかし、12校が参加し総当りで22試合を戦うリーグ戦は4勝14敗4引き分けで勝ち点16。勝ち点で順位を争うリーグ戦最終順位は11位。下位2チームが2部リーグに自動降格するため、愛知東邦大学は2025年度、再び2部リーグで1部復帰を目指すことになりました。



リーグ最終戦
(11月17日、岐阜県養老町で)

石渡靖之総監督の話

創部以来初の1部リーグでの戦いでしたが、残念ながら、力がもう一步足りず2部降格になってしまいました。学園・大学関係者及び保護者、そして支援して頂いている全ての関係者の皆様には感謝とお詫びを申し上げます。多くの選手たちは、精一杯努力して練習や試合に臨んでくれましたが、残念ながら怪我その他の理由で1年間選手が全員揃って試合をすることが出来ませんでした。1部常連の大学は、選手層も厚く前期と後期では別のチームのように感じました。試合で力を発揮できる選手の強化と育成は大変重要であることを改めて知るきっかけとなりました。

来シーズンの1部返り咲きに向けて、既にチームは動き始めました。来シーズン終了時に再び良い報告ができるようチーム一丸で前進したいと思います。

女子サッカー部

2年ぶり皇后杯大会での初戦突破ならず

皇后杯JFA第46回全日本女子サッカー選手権大会に、東海第2代表として2年ぶり3回目の出場を果たした女子サッカー部は11月17日、宇都宮市の栃木県グリーンスタジアムでの1回戦で、ディア



122分の戦いを終えた選手たち

ヴォロッソ広島(中国第4代表)に0-1で敗れました。両チーム譲らず90分を終えて0-0。30分の延長戦も0-0のままロスタイムに入った2分、セットプレーからのゴールを決められ、そのままゲームセット。終了を告げる非情のホイッスルが鳴り渡りました。

米澤好騎監督は「延長戦のロスタイムのラストワンプレーで失点。本当にサッカーは残酷なスポーツだと思いました。あの静まり返った光景は忘れられません」と振り返りました。

2024年度の女子サッカー部は第33回全日本大学女子サッカー選手権大会(インカレ)東海地区予選では4位に終わり、2年ぶり9回目の本戦出場はなりません。また第25回東海女子サッカーリーグ1部での成績は藤枝順心高校に次ぐ2位でした。

大学／行事・クラブ活動

「百花斉放」テーマに活気と創意工夫に満ちた和丘祭

大学祭学生会実行委員長 酒井 来実

2024年度和丘祭は、「百花斉放」というテーマのもと11月9、10日に開催され、例年以上に活気と創意工夫に満ちたイベントとなりました。様々な花が咲き誇るように、学生一人ひとりが個性を発揮し、輝きを放つ姿を目指しました。

半年以上前から始まった準備では、大学祭実行委員会が限られた予算と時間の中で多くの試行錯誤を重ねました。特にサークルの活動を企画にどう生かすかや、出演団体間の調整に苦労しましたが、全員が納得できる形で進めることで一体感が生まれました。

また、今年度は新たな取り組みとして、企業のご協賛をいただき、キャンパス周辺を巡回するシャトルバスを運行しました。これにより、来場者の利便性が大幅に向上



「FREE STYLE」の熱演



大学祭実行委員会のメンバーたち

し、地域の方々や遠方からの訪問者にも快適に楽しんでいただけたと感じています。

当日、キャンパスは模擬店やライブパフォーマンス、展示で活気に満ちました。特に注目を集めたのは、サークルによるステージ発表とお笑い芸人「ほいけんた」さんの登場です。多くの来場者が笑顔で参加し、地域住民も交えた抽選会では歓声が絶えませんでした。

今回の和丘祭は、学生の努力と地域の協力が結実して、さまざまな花を咲かすことができました。これを糧に、来年度はさらに多くの人を楽しめる和丘祭を目指し、準備を進めてまいります。引き続き、皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

日進市30周年で女子サッカー部が夏まつり

日進グラウンドで8月4日、女子サッカー部主催で、日進市市制30周年を記念した「なつまつり」が開催され、1500人近い参加者でにぎわいました。2023年に続いて2回目の開催。午後4時からの開会式では榑直樹理事長に続いて、日進市の近藤裕貴市長が「市制30周年を迎え、流入人口の多い日進市ですが、女子サッカーを含めたスポーツを通じて市民の交流を深めていければと考えており、ぜひ、一緒になって地域を盛り上げていきたいと思っています」とあいさつしました。グラウンドではTOHOマーチングバンドのライブ演奏、サッカー体験コーナー(名古屋グランパスと共同運営)、縁日屋台、企業ブースでの企画が繰り広げられ、午後7時すぎからは盆踊りの輪が広がりました。



人間健康学部の林さんが「学生プレゼン大会」で全国優勝

教育に関するセミナーなどを開催している株式会

社マインドシェア主催の第74回教育情報共有会「全国の学生がプレゼンテーション#4(決勝大会)」が8月20日、東京都港区立産業振興センターで開催され、愛



知東邦大学人間健康学部3年生の林空生さんが、「Best of best」(優勝)に輝きました。決勝大会は「学生生活で成長したこと」をテーマに、西日本、南関東、東日本の3地区大会を上位2位で勝ち上がった6人が出場。8月6日の東日本大会を経て出場した林さんは、「チャレンジから成長へ」のタイトルで、制限時間8分でのプレゼンを行いました。

林さんは、愛知東邦大学に入学して以来、学園スポーツ・文化振興局が名東区の各地域で展開するスポーツイベントに参加。2年生になった2023年度からはサークルとして「スポーツ・健康×まちづくり部」を発足させ、学園スポーツ・文化振興局が各学区で展開するスポーツイベントの運営に積極的に関わっています。

吹奏楽団が売木村で5年ぶりミニコンサート

吹奏楽団は9月8日、長野県売木村で「第12回売木村ミニコンサート」を開催しました。コロナ等の影響でしばらく実施ができず、5年ぶりに「売木村文化



交流センター「ぶなの木」で開催することができました。団員全員が初出演ということで、段取りなど分

からないことだらけでしたが、売木村役場の方々はじめ、皆さまにご指導いただき無事本番を迎えることができました。約70人もの方々にご来場いただき、温かい拍手と声援が、私たちの演奏に一層の力を与えてくれました。

女子サッカー部の田代、浦前さんが愛知チームで佐賀国スポに出場



第78回国民スポーツ大会(国スポ)の成年女子サッカー競技が9月22日から佐賀市で開催され、愛知東邦大学女子サッカー部から2選手が参加した愛知県が5位と健闘しま

した。田代つばめさん(人間健康学部3年)と浦前彩楓さん(同2年)。愛知チームは22日の1回戦で、鹿児島県に1-0で勝利しましたが、23日の準々決勝で広島県に0-1で敗れ、5位で大会を終えました。

人間健康学部の学生8人が「マスターズ甲子園」運営ボランティアで活躍

人間健康学部の8人(3年生5人、1年生3人)が11月9、10日に阪神甲子園球場で開催された「マスターズ甲子園2024」(主催・全国高校野球OBクラブ連合)に運営ボランティアとして参加しました。マスターズ甲子園は全国の高校野球OB・OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を超えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」の夢の舞台を目指そうとする大会。2004年から始まり今年が第21回大会となります。



8人は会場マネジメント、スコア・ゲームレポート、グッズ販売、ボールボーイ、選手誘導の各部署で活躍。ボールボー

イ部署で活動した1年生の木下陽稀さんは、「最高の経験ができました。高校野球をやっていたころにあこがれていた舞台にボランティアとして参加でき、そして、自分と同じ気持ちを持っていて、年齢を経ても甲子園に来てプレーする人たちの手助けをすることができてとてもいい思い出を作ることができました」と話しています。

丹羽さんが2年連続インカレに出場

フィギュアスケート部顧問 河合 厚志



大学祭での壮行会であいさつする丹羽さん

2022年に「部」として新しくスタートを切ったフィギュアスケート部は、設立当初の部員は1人でしたが現在は2人で活動しています。10月、滋賀県立アイスアリーナで開催された西日本インカレ(インカレ予選)で経営学部国際ビジネス学科3年生の丹羽萌々音さんが5級の部で3位となりインカレ本選への出場を決めました。昨年度、姉妹でインカレに出場をしたが、今年度はお姉さんの葵音さんが卒業したので1人での挑戦となりました。新年早々の1月5日、日本学生氷上競技連盟全国大会(山梨県甲府市 小瀬スポーツ公園アイスアリーナで開催)へ出場し、5位入賞と健闘しました。

女子バスケットボール部は3部降格へ

2024年度第95回東海学生バスケットボールリーグ2部で、女子バスケットボール部は総合順位が最下位の6位に終わりました。3部1位の鈴鹿医療科学大学との入替戦でも10月27日の第1試合が71-81、11月2日の第2試合が59-64で連敗し、2025年度の3部降格が決まりました。愛知東邦大学は2023年度に2部に昇格しましたが、3年目での残留はなりませんでした。

山村伸監督(人間健康学部准教授)の話

昨年度まで主力であった4年生5人が抜け、新たな連携を構築することを楽しみに臨んだシーズンでしたが、怪我による選手の離脱が多くあり、チームとしての連携を深めるのに時間が掛かってしまいました。選手自身も大変悔しいシーズンとなりましたが、この悔しさ・経験をばねに来シーズンは必ずやってくれると信じています。今後とも応援よろしくお願い致します。

Ⅱ 高校／行事・クラブ活動

101年目の新たな歴史を刻んだ、 2024学園祭

生徒会正顧問 古田 知子



今年度の文化祭は、学園祭実行委員の生徒たちが「東邦の歴史の中でも『記録』に残る文化祭にしたい」という思いを込めて、「Unity Record～記録に残る東邦祭～」というテーマを掲げました。このようなテーマの下、1学期から企

画立案・準備・練習を進めてきた多彩なクラス企画、クラブ企画、実行委員会企画等が実施されました。PTA企画では、久々に東邦きしめんが復活し、大変な賑わいとなりました。

実行委員会本部企画は、伝統文化の若い担い手が少なくなっているという問題の一方で、固定的なジェンダー観から女性が担い手となれないのはなぜか、という問題意識を大きな主題とした演劇を創作しました。また、名古屋空襲80年企画として、平和実行委員会は、橋本克己さん(ピースあいちの語り部で幼少期に満蒙開拓団の経験を持つ方)と杉山千佐子さん(名古屋空襲で左目を失い、戦後民間被災者への補償を求めて運動してきた方)の体験を語る朗読と、自分たちの平和への思いを絵に表現する「語り継ぎライブペインティング」を行いました。

体育祭は昨年度と同様に午前・午後の二部制で行い、大変暑い中でしたが、学年・団対抗リレーをはじめとして大きな声援が飛び交い、クラスや団の団結を深める機会となりました。

本年度の学園祭を実施するにあたり、ご尽力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

修学旅行を終えて

2学年主任 吉山 奈緒子



2年生たちが最も楽しみにしている普通コース、文理特進コースの沖縄への修学旅行、国際探究コースのシンガポール、美

術科のパリへの研修旅行は、現地での大きな事故や病気もなく参加者全員が無事全行程を終えることができ

ました。保護者の皆様をはじめ、関係各所の皆様のご協力に2年生学年団一同心より感謝申し上げます。

私は第1団の生徒とともに沖縄の修学旅行に参加しました。ガイドさんも驚くほどの悪天候でしたが、生徒の笑顔があふれる3泊4日となりました。旅行の行程の前半は平和学習です。ひめゆり平和祈念資料館では、事前学習で学んだことを目の当たりにし、食い入るように展示を見つめる女子たち、感想文コーナーでたくさん感想を書いたと話す元気な男子の姿が印象的でした。平和祈念公園でのセレモニーは厳粛な雰囲気の中で行われ、真摯に平和を願う生徒の姿は今も私の目に焼き付いています。「沖縄戦や平和について学校でしっかり教えてくださって、ありがとうございます」というお言葉を現地で何度かいただきました。平和教育を大切にしてきた東邦高校の精神を生徒たちが感じてくれたのだなと胸が熱くなりました。旅の後半は、タクシー研修や体験学習など、グループでの行動が中心の行程でした。

最終日の「帰りたくない」という生徒たちの言葉から、仲間との絆を深め、この旅行を心から楽しんだことが伝わりました。皆の思い出に残る貴重な経験となりました。

卒業制作展を終えて

美術科学科主任 前橋 瞳

2024年度美術科3年生卒業制作展「第32回未来の芸術家たち展」が10月29日から11月4日、愛知県美術館Gギャラリーにて開催されました。総勢1626人のお客様にご来場とご高覧を賜り、誠にありがとうございました。

作品の搬入、制作者によるギャラリートークの実施、愛知県立芸術大学の岡田眞治先生、倉地比沙支先生、葉栗里先生、佐藤直木先生によるご鑑賞とご講評、搬出まで盛況のうちに無事終えることができました。愛知県立芸術大学の教授陣からいただいた講評は、学生たちにとって大きな学びとなり、今後の成長の糧となるものでした。専門家からの的確なアドバイスや、各作品に対する深い洞察に触れられたことで、制作者たちの意識が高まり、さらなる向上を目指すきっかけとなりました。

卒業制作は、制作者の今までの集大成であり、これからの原点となる作品です。長い制作期間中、高い緊張感と不安や迷いを伴いつつも努力し、各自の理想の実現に挑戦する作品が並びました。これを糧に、制作者指導者ともに次に向けて邁進いたします。保護者の皆様、教職員の皆様には、多大なご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

みんなで決め、一致団結

科学研究部 東村 俊治



科学研究部は、今年度1年生18人を迎え、総勢31人と例年になく大所帯のクラブへと変わりました。今まで生徒数名での活

動でありましたので、部活動の中身が本当に何もかも変化しました。そんな中でも、新たに顧問に加わっていただいた内田百花先生の若い発想と情報の技術に助けられ、また生徒へ非常に親身でいてねいに接して下さり、本当に感謝しています。

さて、今後の活動についてですが、これからも仲間を増やし、すべての部員が協力して様々なイベントを成功させられるよう、部員全員で運営していきます。ボランティア活動や研究発表の他、今年度から畑を借りてイチゴ栽培を始めました。この取り組みも、全員が携わってみんなで収穫できるよう、「みんなで決め、一致団結」を念頭に活動していきます。一人でやってもうまくいかないことが、みんなでやってみたらできた！と思える体験を、この部活動を通して醸成していけたらと思っています。

全国大会で優秀賞、ヤマハ賞を受賞

吹奏楽部顧問



平素より吹奏楽部の活動に多大なご協力とご理解をいただきましてありがとうございます。吹奏楽部は「共奏」をモットーに

掲げ、学業との両立を心がけながら日々練習に励んでいます。

2024年6月には、中村文化小劇場にて第66回定期演奏会を成功のうちに終えることができました。ここでは、自主的に演奏会を組み立てることの難しさとやりがい学びました。そして、その経験の上に、日ごろの努力も積み重なって、昨年度に引き続き、2024(第30回)日本管楽合奏コンテスト全国大会高校生A部門に出場を果たすことができました。さらにこの大会では、優秀賞を受賞すると同時にヤマハ賞を受賞することができました。これは私たち吹奏楽部にとって初めての快挙であり、生徒たちにとって大きな達成感と自

信につながりました。

これからも私たちの音楽を聴いて下さる皆様からの応援を励みにして、練習に一生懸命取り組んでまいりますので、応援を宜しくお願いいたします。

元気を与えられる部活を目指す

バントワリング部顧問 加藤 強



2024年度は1年生9人、2年生6人、3年生21人で活動してきました。夏に3年生が引退し、例年に比べ少数精鋭で

バトンの全国大会に向け、練習に励んできました。残念ながら全国大会には手が届きませんでした。合宿や、何度も行ってきたミーティングにより、部活動の結束力は高まったと信じています。

大会だけでなく、様々なイベントに呼んでいただき、ステージ発表も行ってきました。いろんな人に見られているという意識をして演技をすることで、さらなる向上心をもって臨むことができました。

ただ演技をするのではなく、人に元気を与えられるバトン部を目指してさらに頑張ってもらいたいと思います。

日々の積み重ね

女子バスケットボール部顧問 明石 魁斗

8月に新チームにとって初の公式戦である名北支部バスケットボール競技夏季選手権大会が行われました。初戦から苦しい展開が続きましたが、一人一人が自分の役割を果たし、ミス全員でカバーし、粘り強く戦った結果第3位で終えることができました。しかし、9月に行われた全国高等学校愛知県選手権大会名北支部予選では2回戦で敗退し県大会出場ができませんでした。1月から始まる県高等学校新人体育大会名北支部予選で勝ち上がり、県大会に出場し、一つでも多く勝ち上がることができるように、日々の練習の一分一秒を大切に、バスケットボールを通じて、チームワークの大切さや自己成長を実感しながら、目標に向かってさらなる成長を続けていきたいと思っています。今後ともよろしくお願ひいたします。



地域・国際交流行事

杭州市の海外交流協定校 2校を訪れて

経営学部 4年 井口 稚菜



中央が井口さん
(浙江旅游職業学院教室で)

愛知東邦大学では2024年度、国際交流センター開講科目「海外研修B」プログラムとして8月30日から9月12日まで2週間、中国(上海市、杭州市)での学生インターンシップと、交流協定校である2校訪問を行い学生3人が参加しました。

ツアーには地域・国際交流課の安井文康課長が同行し、最初の5日間は上海市に滞在し、本学と友好関係にある東息教育集団投資管理有限公司の協力を得て3企業でインターンシップを実施。残りの9日間は杭州市にある本学の交流提携校である浙江経貿職業技術学院と浙江旅游職業学院を視察しました。

上海市でのインターンシップで、携帯電話やスマートウォッチなどに使用する精密部品を製造する企業の昊佰(ハオパイ)社、地下鉄車両や電子機器のメンテナンスを行う企業である元壤(ウエンラン)社、国有企業であり電子製品製造や都市開発を手がける総合商社の上海儀電INESA社のお世話になりました。

杭州市の協定校訪問で最初に訪れたのは浙江経貿職業技術学院です。日本語の授業を行っていた2年次の講義に参加させていただきました。就職活動について学んでおり、日本語の文章を中国語に訳したり、下線文の意味を読み解くなど日本での英語の授業のような形の講義をしていました。

学生の中には、JLPT(日本語能力試験)資格を持っている

人もおり、学びを自分のものになっていると感じました。講義後は、敷地内を案内してもらい、その中に大きな図書館がありました。本の形をした建物で、様々な分野の本があり、その中に日本の小説も多くありました。館内には、寮生活を送る学生のため、24時間利用可能な自習室もあり、多くの人が学びに励んでいました。

日本語の講義と一緒に受講した学生とバドミントンをし、夕食を共にしながらおすすめの見学スポットを紹介してもらったり、両国のディズニーランドの違い、季節の花の写真を見せ合うなど楽しい時間を過ごしました。

2か所目に訪れた浙江旅游職業学院では、日本の旅館で使用する日本語の講義と、日本語文章の小さな言葉の違いについての講義に参加しました。どちらも日本語がある程度理解できていることが前提に進んでいる内容であり、学生自身も日本語が理解できているように感じました。休み時間でも日本語が飛び交うことがあるくらいのレベルでした。太極拳の講義にも参加し、初めての太極拳を楽しみました。

2校ともほとんどの学生が寮生活を送っており、アルバイトをしている学生は少ないそうです。学内の敷地はとて広く豊富な食堂メニュー、コンビニ、生活用品店の充実が印象的でした。日本語を学ぶ中国の学生は、「好き」が原動力となっていると感じました。日本のアニメや漫画、歌などが好きで学びたいと思ったと言う学生が多くいました。好きなモノをより理解したいと言う熱量や、「私は日本のこれが好き!」と好きなのところを主張してもらえたのはとても嬉しく思いました。

今回のツアーでは入国前から帰国後まで東息教育日本研究院の姚曉敏先生を始め現地の職員の方に大変お世話になりました。本学にも2校からの留学生が在籍しており、来年度以降も新たな留学生が来ると思います。学生同士の交流としても深めていけたら嬉しく思います。

「うるぎトライアルRUN」にボランティア参加して

経営学部国際ビジネス学科 4年 郭 煜杭



売木村での郭さん

愛知東邦大学と連携協定を結ぶ長野県売木村で10月13日、マラソンの「第9回うるぎトライアルRUN」が開催され、学生3人がボランティア参加し、昨年の第8回に続いてYouTubeで生配信を行いました。3人は経

営学部4年生の郭煜杭さん、浅井将尊さん、同3年生の高橋竜也さん。中国からの留学生郭さんの売木レポートです。

今年も再び売木村を訪れる機会をいただきました。地域・国際交流課課長の安井文康さん、経営学部の谷口正博先生、他の学生たちと共に、南信州の美しい自然の中で2回目のマラソン大会に参加しました。

今回は、さらに多くの外国人選手も参加しており、日本と海外の距離が縮まっていると感じました。このような国際的なイベントを通じて、異なる国の人々が交流し、互いの文化を理解し合うことは、私にとって非常

に大きな意味を持っています。特に、売木村のような地方で行われるイベントは、都市部とは異なる日本の文化を海外に伝える絶好の機会であり、私自身もその一助になれたことを誇りに思います。

今回の訪問では、地元の方々との会話を通じて、日本と中国が文化や価値観を共有できる部分を多く感じました。清水秀樹村長とのインタビューでは、地域の歴史や伝統、そして未来への展望について語っていただきましたが、その中で感じたのは、日本の地域社会が持つ温かさや、文化を守り続ける人々の努力です。これは、中国の地方都市にも通じる部分があり、国境を越えても、私たちが共有できるものがたくさんあることに気づかされました。

私は、このような日中間の文化交流がさらに進展し、お互いの理解が深まることを強く願っています。特に、若い世代がこうした交流を通じて新たな関係を築き、日中友好の未来を担っていくことに期待しています。私自身、これからも日本での経験を大切に、中国との架け橋として役立てたいと考えています。

ただ、私にとってこの大会への参加が最後になるかもしれません。3月に卒業し、社会人として新たな道を歩むこととなりますが、売木村での経験は私にとって一生の宝物です。もし、次回再び訪れる機会があれば、今度は選手としてこの美しい村でのマラソンに挑戦し、さらに深く日本の文化に触れたいと強く思っています。

東邦学園も参画し「名東区スポーツ・健康×まちづくり協議会」がスタート

2024年10月7日、名東区生涯学習センターにおいて、「名東区スポーツ・健康×まちづくり協議会」の設立総会が開催されました。2023年度に名東区、名東区体育協会、名東区スポーツ推進委員連絡協議会、名東区小中学校長会および学校法人東邦学園で行った5者協定に基づき設立されたもので、名東区内の学区やスポーツ関連組織等33団体が参画して発足しました。

協議会は、新型コロナウイルスにより休止していた名東区内のイベントや高齢化に伴い人手不足となっている事業を支援することで、地域社会の発展を目指します。東邦学園も、学生を中心に名東区のまちづくりを盛り上げるとともに実践的な学びの場として参画します。

「駅スポ!!」をはじめとしたスポーツイベント

スポーツイベントは、従来の学区主催のイベントに加え、藤が丘中央商店街振興組合との共催で「駅スポ!!」と題したイベントを藤が丘中央商店街事務所前広場で開始しています。

これは買い物や駅を利用する人も気軽にスラックラインなどのアクティビティや健康測定を行うことができ、体を動かすことの楽しさや健康状態を知ってもらうことを目的としています。このイベントは、本学の「スポーツ・健康×まちづくり部」が実施内容から支援学生の募集、広報に至る企画を行っています。また当日は部員だけでなく本学の学生が中心となって運営をしています。

これまで4回実施しましたが、第3回以降は100人を超える参加者をえて、10月のイベントでは200人に近づく人を迎えることができました。「スポーツ・健康×まちづくり部」は回を重ねるたびに、内容を見直し



て工夫を行い「駅スポ!!」をバージョンアップさせています。

3月16日には本年度最後の「駅スポ!!」を予定していますが、次

回こそは200人を超える方に参加していただけるようさらに改善を行い、魅力ある内容を、多くの人知ってもらう広報活動に力を注いでまいります。ぜひ、皆さまもご参加ください。



〈駅スポ!!〉

- 第1回 5月19日(雨天中止)
- 第2回 6月9日
(71人 午前のみ 午後の参加者不明)
- 第3回 10月27日(171人)
- 第4回 11月24日(126人)
- 第5回 12月8日(113人)
- 第6回 2025年3月16日(予定)

〈名東区・学区〉

- | | |
|--------------|------------|
| 猪子石学区運動会 | 10月6日 |
| 香流学区モルック大会 | 10月20日 |
| 極楽学区運動会 | 11月3日 |
| 3学区合同フェスティバル | 11月17日 |
| めい冬フェスティバル | 12月14日 |
| 引山桜まつり | 2025年3月30日 |

「スポーツ・健康×まちづくり部」

奥村 泰地(経営学部2年)

私たちの部は、昨年度に創部し、現在は1～4年生までの合計12人で活動しています。

今年度は「駅スポ!!」という駅前商店街を活用したスポーツイベントを計5回実施して、合計481人の方々に参加してもらいました。他にも地域の盆踊りやお祭り、運動会、モルック大会など全12回のイベントに参加して、地域の人たちと一緒に盛り上げていきました。

12月には九州共立大学で開催された地域連携シンポジウムに参加し、部のこれまでの活動とこれからの目標を報告してきました。他大学の人たち

と交流してみても、自分たちの活動の方向性について考えることができるとも刺激的でした。同じような活動をしている人



九州共立大学でのポスター発表

の話を聞いたことがなかったので、とても有意義な時間になりました。

来年度は部の最終目標である「地域で頼られる存在」となることを目指して、地域の人たちとさらなる関係性を築いていきたいです。

フレンズ・TOHO 今後の行事予定について

2024年度のフレンズ・TOHOの行事につきましては、昨年6月28日(金)に総会を開催し、ご参加いただいた皆様には早稲田大学人間科学学術院名誉教授竹中晃二氏による講演「人生100年時代のメンタルヘルス」を聴いていただくことができました。

今後の行事につきましても、本会の活動の趣旨を重視し会員の皆様に還元できるものを開催していきたいと考えております。

今後、以下の行事を予定しております。会員の皆様におかれましては是非ともご参加いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

◇講演会と名刺交換会

日時：2025年2月14日(金)13:30から

場所：名古屋ガーデンパレス

講演会講師：一般財団法人ベップトーク普及協会専務理事

一般社団法人日本朝礼協会理事 浦上大輔 氏



浦上大輔氏

◇2025年度 定期総会・講演会

日時：2025年6月27日(金)

場所：名古屋東急ホテル

講演会講師：国際コーチング連盟 代表理事

(株)ARUKUKI 代表取締役 奥野雄貴 氏

東邦学園100周年事業募金のお願い

東邦学園は2023年に創立100周年を迎えました。更なる100年に向けて、東邦高校は「目指す生徒像」を掲げ、「自分で考え自ら行動する生徒 他者と共に歩む生徒 強い心で挑戦する生徒」の育成に努めます。愛知東邦大学は「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」のもと、「人材育成と学術で地域社会の活力を生む創発大学として新たな時代を切り拓く」ことを掲げ、個別重視の「テラーメイド教育」に力を注いでまいります。

各事業計画を進めるにあたり、学園としても資金を準備していますが、皆様方からもご寄付をお寄せいただきたくお願い申し上げます。

学生・生徒一人一人を見つめ、それぞれの可能性の芽を育むことを教育の柱に置き、混迷の時代を乗り越えてゆける人材を送り出す教育機関に対し、どうかお力添えをお願いいたします。

◇募金目標額 5億円

◇募金の主な用途

教育環境整備、施設設備の充実、学生・生徒の教育活動への支援

◇お申込期間・金額

【東邦学園創立100周年記念募金】

2021年11月から2026年3月まで

個人：1口5千円、法人：1口10万円

複数口のご協力をお願い致します。(1口未満のご寄付もありがたくお受けいたします)

【百年レンガ募金】 ※原則、高校同窓生・在校生対象

2021年11月から当分の間

個人：1口5万円

アルファベットによるご芳名をレンガに刻印、高校正面玄関横に設置させていただきます。

◇お手続き・申込方法

学校法人東邦学園の公式Webページにある「ご支援のお願い」の「寄付のお申し込み方法」にある専用入力フォームからお申込み下さい。



募金に関する学園Webページ：<https://www.toho-gakuen.jp/donation>